



石を知り尽くし、伝統の技を守り続けて60余年。採石による天然資源のロスゼロを追求し、資源の有効活用を通じて地域と共生し、地域に貢献し続ける。

TOP INTERVIEW TP

株式会社 堀石材工業 代表取締役 堀 義己 ほり よし み

長年にわたり採石を通じて地域社会に貢献し続けてきた株式会社堀石材工業（本社：茨城県桜川市）の堀義己社長に、石材産業の現状、輸入材と

国産材の違い、また環境問題への対応や将来に向けた抱負などについてお聞きしました。

（聞き手：弊社社長 大森 範久）

伝統ある石材企業の3代目代表に就任。社会の変遷に伴い、お墓の事情も大きく変化。

貴社には70年近い業歴があると伺っておりますが、これまでの歴史についてお聞かせください。

社長 弊社は祖父の堀義雄が1957年（昭和32年）に創業しました。農家の二男だった祖父は、学校を卒業して丁稚奉公に出て一から石材加工に従事しました。修行していた当時は、努力もさることながら元々才能もあり、「堀がつくったものは検品不要」と言われるほど腕を見込まれていたそうで、独立後は業容拡大に努めました。

そして1968年（昭和43年）に実父の堀政美が事業承継したタイミングで当社を設立し、社長に就任しました。やがて受注の増加により機械を24時間フル稼働させる必要が生じたため、1971年（昭和46年）、周囲

にあまり民家がなかった現在の場所に移転しました。

その後、私が3代目の代表に就任して現在に至ります。



取材風景 左：関根 宏明支店長 中央：堀 義己社長 右：大森 範久社長



最近の石材産業の状況はいかがでしょう。

**社長** 社会の変遷に伴い、お墓の事情も変化しています。その要因としては大きく二つ考えられ、一つはサラリーマンの勤務形態の変化で、もう一つは葬送の多様化です。勤務形態の変化に関しては、九州から北海道まで日本全国を転勤するような会社員の場合、遠隔地に住居を構えると帰省もままならず、お墓の維持が難しくなり

ます。また葬送の多様化については、永代供養や樹木葬など親族が集い合掌する場所が残ればよいのですが、海や山に散骨されるとお墓自体が不要になります。跡取りがないご家庭では墓仕舞いしたり、両家のお墓を一つにまとめるケースも増えていてお墓をめぐる事情は大きく変化しています。

## 茨城県の石材出荷高は国内トップ。 県内の若手後継者を中心に、県内産の石にこだわる新会社を設立。

こうした状況の変化は業界全体に波及していると思いますが、石材産業の中央組織は「日本石材産業協会」になるのでしょうか。

**社長** その通りです。石材産業協会において20年ほど前に青年部の統合があり、その組織が成長したのが現在の日本石材産業協会です。この協会は採石や加工などいくつかの部会を統合し組織化されたもので、今でも部会ごとの活動は継続しています。

茨城支部は石材卸業者・約80社から構成されていますが、東京支部に次いで全国第2位の規模を誇ります。

茨城支部の規模はかなり大きいんですね。

**社長** 茨城県の石の出荷高は国内トップです。私は数年前に茨城県支部の支部長や、全国を8つのブロックに分けた北関東と信越地区の責任者などの要職を経験しましたが、現在は40代の若手が仕切るようになり徐々に若返りが図られ、次世代を中心とした頼もしい組織へと成長しています。

茨城県内での目立った動きはございますでしょうか。

**社長** トピックスとしては、茨城県内の石材採掘業者5社と加工業者7社の計12社が集まり「茨城の石本舗」と

いう会社を2015年（平成27年）に立ち上げたことです。「茨城産の石を使用し、茨城の工場で加工する」というコンセプトに賛同する、業界では比較的若い後継者が集まって創設した会社で経営陣の意識は高く、「業界を盛り上げていこう！」という熱意に溢れ、これからが楽しみです。

事業領域は既存事業と交錯しないのでしょうか？

**社長** この会社は「輸入材は取り扱わず、国産材にこだわる」ことを掲げており、既存の事業領域とは明確に棲み分けされているので営業面でのバッティングはありません。逆に国産材でも特に茨城県産の石材にこだわることで、これまでは接触が図れなかった全国展開中の上場企業とも繋がることができました。

弊社で取り扱うのは稲田石のみですが、真壁石、羽黒石等、県内産それぞれの石の取扱業者も加入しているので、茨城県内で採取可能な全ての石のラインナップが揃っています。各企業の若手後継者が経営に参画し、各々の強みを一番発揮できる事業形態なので、毎日頑張って営業に取り組んでいる小売業者の皆さまともがっちりタッグを組むことができ、今後の展開が大いに期待できます。

## 市場に流通する石は国産材が1割に対し輸入材が9割。 しかしキメの細かさでは断然、国内産が勝る。

国産材と輸入材の一番の違いは何でしょうか？

**社長** 一番の違いは価格です。日本で流通している石のうち国産材は1割程度で、輸入材が9割を占めています。

しかしキメの細かさにおいては、輸入材は国産材に全く太刀打ちできません。日本の石は約6,000万年前にできた石で中国の石はその倍以上前、約1億5,000万年

前から約1億2000万年前にできた石です。土の中とはいえ長い年月の間には石も風化するし、経年劣化の度合いも大きいので、キメの細かさは人間に例えると20代と80代の人肌を比較するぐらい大きな違いがあります。

一番の輸入先はどの国なのでしょうか。

社長 一番多いのは中国です。中国にも石の産地は

いくつかありますがその中でも最も大きいのが福建省で、<sup>アモイ</sup>廈門市の港から大量の石が輸出されています。

もちろん輸入した石は弊社でしっかりと検査し、基準を満たさない石はすぐに指摘して交換を依頼します。対象物が重く送料が高いため、問題が発生した場合には別の石を再送してもらい、手元にある石は日本で処分するのが通例です。

## ベトナムやカンボジアからの輸入もあるが量は僅少。 今後の取引拡大に向けては工場の育成が必要。

中国以外の国からの輸入は無いのでしょうか？

社長 最近ではベトナムやカンボジアからも中国産と同じような模様の御影石が輸出されていますが、国自体が小さく産出量が少ないので輸出量もごく僅かです。

それに中国には石造りの家をはじめ「石の文化」が根付いていますが、ベトナムやカンボジアには同じような文化はありません。昨年12月、常陽銀行の情報をもとにベトナム南部を視察した際も、工場の数は少なく、加工技術のレベルもそれほど高くはないように見受けられました。

ベトナムとの取引は難しそうですね。

社長 ベトナムは国内で需給バランスが取れているため、あまり輸出を意識していないようです。そのせいか技術レベルは中国に比べて6~7割程度ですが、加工賃料は中国と同等の額を要求する工場がほとんどで、ビジネスに繋げるには時間をかけて工場を育てなければならない印象です。但し最近のベトナムでは、国が経済的に豊かになり家庭にゆとりが生まれたことでお墓を造る傾向がみられます。特に裕福な家庭では自分のお墓に日本のデザインを取り入れたいというニーズが高まっているようで、こうした需要は今後伸びていくように感じました。

## 茨城県は石の三大産地の一つで、 都内の有名建造物などの約8割は茨城県産の石が占める。

ここで改めて国産の石の代表的な種類や特徴についてお聞かせください。

社長 世界で一番高価な石は四国・香川県の<sup>あじいし</sup>「庵治石」です。また有名なお城、例えば東京の江戸城や石川県の金沢城の石垣には、柔らかくて加工しやすい安山岩が使用されています。石の種類では福島県が一番多く、以前は弊社も飯舘村に採石場を保有していました。ですが、中国から非常によく似た柄の安価な石が次々と輸入されてきたため、30年以上前に閉鎖した経緯があります。

また「石の目」は、大目、中目、小目、<sup>ぬかめ</sup>糠目、の4つに大きく分けられ、大目が弊社で取扱う稲田石の特徴

です。ここ茨城県では真壁から稲田まで南北に鉱脈が走り、地層は繋がっていますが、石が固まるスピードや含有する成分の量が微妙に異なることで石目が変わり、各々の石の特徴となっています。そのなかでも「糠目」が一番キメが細かく、茨城県では稲田と真壁の境目でごくわずかししか採れない希少性が高い石です。

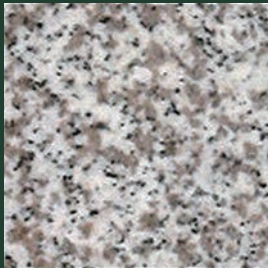
茨城県産の石は具体的にどのような場所に使用されているのでしょうか。

社長 茨城県産の稲田石は東京の日本橋、東京駅前の丸の内側の大通りをはじめ、最高裁判所や広島市の平和都市記念碑、また三井住友銀行の本店にも使用されて

います。日本の石材の三大産地は茨城、愛知、香川の3県で、それぞれ東京、名古屋、大阪という三大消費地を抱えていたことが背景にあるようです。このように茨城県産の石は、明治初期から東京都内の様々な場所で使用されてきたので、都内の約8割の石は茨城県産の石が占めています。

もちろん地元の茨城県庁にも使用されており、駐車場上部の広場の半分は弊社で施工しました。そこに使用されている石の比率は国産が約2割、中国産が約8割です。国産と輸入物の違いは業者が見れば一目瞭然ですが、中国産は黒色やピンク色の石が多く、白色の石が基本的に茨城県産の石です。

## 稲田石

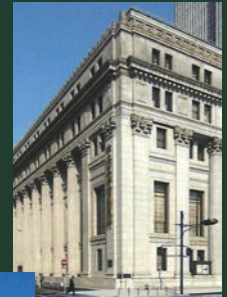
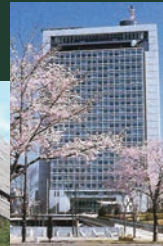


「白い貴婦人」と呼ばれる、  
気品に満ちた御影石



▲現代建築／最高裁判所

現代建築／  
茨城県庁舎▶

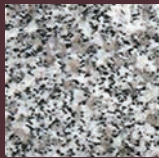


▲現代建築／  
三井住友銀行本店

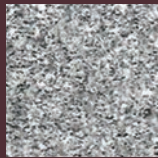


モニュメント／  
広島平和都市記念碑▶

## 真壁石



中目石



小目石

やすらぎを生む美しさ。  
墓石日本一の逸品



▲現代建築／迎賓館赤坂離宮

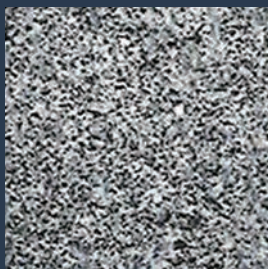


▲モニュメント／大洗アクアワールド



現代建築／  
つくばセンタービル▶

## 羽黒青糠目石



青くきめ細かやかな石肌。  
気品と重厚感ある最高級  
石材



▲モニュメント／羽黒駅



▲東日本大震災復興モニュメント／千年の舟



◀復興支援  
モニュメント／鮭鱈



# 採掘には莫大な設備投資が必要だが、 採取した石材のうち市場に出荷できるのはごく僅か。 SDGsの観点から廃棄処分ゼロを目指して研究を積み重ね、 資材の有効活用に関しては国内でトップレベル。

茨城県で採取できる石の特徴や状況についてもう少し詳しくお聞かせください。

**社長** 弊社で取り扱う稲田石は部材を大きく取れて、産出量が多いことが特徴です。外柵に白い稲田石を使い、中央の石塔の部分に色が濃い羽黒石や真壁石を使うとコントラストが効いて引き立ちます。しかし真壁石も、稲田石も、採取した石のうち1割程度使えば上出来で、糠目に至っては1～2%程度しか使えません。国内では一級品しか市場に出荷できない厳しい事情があるため、残りの9割の石の多くは護岸工事などで埋め立てや防波堤として使用されます。

お墓のあまり見えない部分などを二級品の石でカバーしたり、各々の石特有の模様をうまく活用することが、今後の課題と言えます。

9割近くの石は使えないとのことですが、採石にはどれくらいの費用がかかるのでしょうか。

**社長** よく「原材料にお金がかからなくていいね」と言われるのですが、決してそのようなことはありません。



採石場風景



山砂を用いた枯山水

弊社の15ヘクタールの採石場は国有地と民地が半々ですが、各々地代を支払っています。しかも国有地は、樹木一本、表土、硬い石、柔らかい石、など詳細な単価が設定されているので、その全てに対価を支払っています。

また弊社の採石場は笠間市と桜川市に跨っているため茨城県庁・本庁の管轄となりますが、原状復帰が前提条件なので5年に1度は全域を測量し直します。そして水捌けから植林に至る詳細な採掘計画を更新しますが、その費用負担も相当な額になります。さらに採石場では、1台3,000～4,000万円もする重機が常時10台以上動いており、採石には膨大な資金が必要です。

莫大な設備投資をしても、大半の石が市場に出荷できないのはもどかしいですね。

**社長** そこで弊社では、砂利や化粧砂に使用する部分も含め、SDGsの観点から「使えるものは全て使い切る」という考えのもと、1基に付き1億円を投資して採石場にプラントを2基建設しました。天然資源である木を伐採し、土を掘り、石を切り取っているため、全てを使い切りたいという意識が強く、採石場から産出する資材の100%出荷を目指しています。

関東エリアで山砂から一級品の稲田石まで余すところなく使用しているのは弊社のみで、そこが弊社最大の強みでもあります。廃棄処分する資材はほぼ無いというレベルまで研究し尽しており、この分野に関しては、国内でも最先端を走っていると自負しています。



## SDGs宣言

株式会社堀石材工業  
2023年9月30日

当社は、経営理念である「日本一の石材産地 茨城の自然の恵みを活かし、生活空間を豊かにするとともに、広域の良を守り地域社会と共生し発展を目指す」活動を通じて、地域の様々な課題の解決を目指しています。当社の事業を通じたSDGsの達成に向け、下記の取り組みを実施していくことを宣言します。

<p><b>製品品質の確保</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・製品安全に関する方針および品質に関する標準の明確化</li> <li>・熟練工の技術継承を行うための、研修機会を充実</li> </ul>	<p><b>環境保全への取り組み</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・産業物の適切管理および削減</li> <li>・富栄養化防止型排水処理</li> <li>・生物多様性に配慮した活動</li> <li>・3Rの推進、資源機を利用した水資源の循環活動</li> </ul>
<p><b>人権の尊重・労働環境整備</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・差別の禁止</li> <li>・ハラセメントの禁止</li> <li>・労働環境の整備を継続して行い、長時間労働の抑制を継続</li> <li>・健康経営活動の継続</li> </ul>	<p><b>地域社会への貢献</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工場見学等の積極的な受け入れ継続</li> <li>・地域自治体等との交流</li> <li>・各団体を通じて、社会貢献活動への積極的な参加</li> <li>・地域資源の積極的活用</li> </ul>



SDGsとは、2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標」です。17の目標と169のターゲットから構成されており、2030年までに達成を目指す国際目標です。



## 価格競争が激化しており、今は辛抱のとき。 将来的にはシステムを構築し、石造りの人材育成を図りたい。

地域資源の活用に尽力されているのがよく分かりました。ここで話題を変えまして、現在の課題についてお聞かせください。

**社長** 最大の課題は職人の確保です。中国から安価な石が輸入されたことで国産材の石の価格も合わせざるを得ず、その結果売上も頭打ちとなり、賃金の引上げも難しくなります。そのため従来以上に人が集まらなくなり、外国人労働者でカバーしている状況です。

社員の給料をもっと上げたいとは思いますが、今は価格競争が激化しており辛抱の時で、いずれ国産材の石の評価が見直され、販売価格が向上した際には社員に還元したいと考えています。

加工場と採石場のスタッフは何名いらっしゃるのでしょうか。

**社長** 現在、弊社の加工場には13名、採石場には8名のスタッフが作業していますが、どちらも業界トップクラスの人数と人材を配置しており、採石場は今も会長が仕切っています。会長は16歳の時から67年間もの間、石材の加工に携わり山を仕切ってきたので経験も豊富で、私は

まだまだご教示いただきながら修行している状況です。

また石の研磨には熟練の技術が必要で、職人として1人前になるには最低10年かかります。黒い石の場合には白い石より工程が複雑で、習得にはさらに時間を要します。そのため、将来的にはしっかりした一貫性のあるシステムを構築し、石造りの人材育成を図っていきたく考えています。



将来を担う若手スタッフ



加工場と事務スタッフ



熟練の技術を要する研磨作業



採石場スタッフ



## ライバルは商社。

**石を知り尽くした弊社は現地調査から施工まで全ての作業を請負い、小売店からの信頼も厚い。これからも採石を通じて地域社会と共生し、地域に貢献する。**

貴社の競合先としてはどのような先があるのでしょうか。

**社長** 弊社は、首都圏の石材小売業者への卸売りが8割を占めるので、一番の競合先は商社になります。商社は中国から安く仕入れた石を単純に卸すだけなので業績を伸ばしていますが、実際には加工できないような無理なデザインを加工業者に依頼することもあり、石の特性を知らない人が机上のイメージだけで図面を描いているように感じる場合があります。

その点、弊社は加工工場を保有し長年の経験や豊富な知識があるので、精度に優れ、見栄えを意識した、効率的な手法で作業を進められます。石を知り尽くしている弊社は、見積りや図面作成の精度とスピードでも、どこにも負けないと自負しています。

**高度な技術力と対応力が石材小売店との信頼を築いているのですね。**

**社長** 弊社が現地調査から施行まで全ての工程に対応するので、小売業者の皆さまは営業に集中していただけます。そのためお客さまのほとんどが弊社のファン

になってくれたリピーターの石屋さんです。卸売りがメインなので小売りについてはHPに掲載していませんが、それでも一般のお客さまからも時々問合せがあります。弊社にお声掛けいただければ、設計から施工まで安心して全てを任せていただけます。

**PRをお願い致します。**

**社長** 石が採れるからこそ産地になったわけで、採石をやめてしまうと何も残りません。

弊社の経営理念にもあるように、茨城の自然の恵みを活かし、伝統の技を守り、地域社会と共生しさらなる発展をこれからも目指します。そのためにも採石場を残したいし、採石場を持つこと自体が強みになります。採石を通じて地域に貢献するためにも、「茨城の石本舗」の若手メンバーたちと知恵を出し合い、共にこれからの石材産業を盛り上げていきたいと考えています。



採石場



縦4m、横8mを誇る稲田石の一枚岩の看板



プラント全景

## COMPANY PROFILE 株式会社 堀石材工業

## 会社沿革

1957年(昭和32年) 5月	岩瀬町西小埜548番地において石材業を創業。千葉県松戸方面を主体に販売開始。	11月	下館労働基準協会より衛星管理面で表彰される。
1962年(昭和37年) 1月	西小埜1042番地に工場移転。稲田石採掘場開発着手。東京都多摩方面へ販売開始。	12月	県知事より中小企業近代化経営効率面で表彰される。
1967年(昭和42年) 1月	八郷町上曾山において採掘場開発着手。北海道への販売開始。	1973年(昭和48年) 3月	建設業知事登録第1742号を受ける。
1968年(昭和43年) 12月	有限会社堀石材工業設立。資本金200万円。代表取締役社長に堀政美就任。	10月	資本金800万円に増資。
1969年(昭和44年) 1月	建設業知事登録土木・石材業3734号を受ける。静岡方面へ販売開始。	1974年(昭和49年) 3月	資本金1,200万円に増資。
1970年(昭和45年) 4月	業務拡大に伴い西小埜1857番地に新工場建設、稼働開始。	12月	運送部門独立。株式会社太陽運送設立。
	7月	1975年(昭和50年) 2月	小山市駅南町に小山営業所開設。小山市・宇都宮市を中心に栃木県方面への販売開始。
	県内での営業力強化のため鹿島郡旭村に旭営業所開設。	5月	有限会社福原石材工業・有限会社大吉石材工業との共同出資により茨城石材販売株式会社設立。札幌市豊平区に営業所設置。
1972年(昭和47年) 2月	資本金を500万円に増資。	1976年(昭和51年) 12月	資本金1,500万円に増資。
6月	水戸市宮浜見台霊園新設を機に水戸市堀町405番地に水戸営業所を開設。	1978年(昭和53年) 5月	有限会社福原石材工業・有限会社大吉石材工業・竹江石材工業との共同出資により茨城商事株式会社設立。石材加工機械・消耗工具の販売開始。

## 会社概要

株式会社 堀石材工業

代表取締役 堀 義己

所在地 〒309-1451 茨城県桜川市西小埜1042

電話 0296-76-1234

F A X 0296-76-0830

U R L <https://www.inadaishi.com>

創業 1957年(昭和32年)

登録 茨採石登録第508号

採石場・工場 〒309-1635 茨城県笠間市稲田4511

電話 0296-74-4760

F A X 0296-74-4352

事業内容 石材全般に渡る計画・設計・施工・監理

営業品目

- 稲田石・採掘元
- 国内外産御影石各種加工販売
- 中国産御影石各種販売
- 山碎石・割栗石

工事種目

- 墓所・墓石工事に関する設計・施工・監理全般
- 公共工事に関する施工・監理全般
- 石積・石組・石貼工事全般
- 民間の外部空間の設計・施工・監理全般

## After the interview

祖父の堀義雄氏が創業した当社は、2代目の実父・政美氏が法人化し、3代目・義己氏へと引き継がれました。創業から68年という長い歴史は、パプルの崩壊や輸入材との競合など、多くの厳しい経営環境の変化を乗り越えてきた歴史でもあります。現在も経営環境は大きく変化していますが、今回の取材では環境への配慮という点に着目しました。

茨城県で産出された石の多くは東京都内の著名な建造物に使用されています。これらの建造物には完成から80年近い時間が経過するものもありますが、今も昔と変わらない姿で多くの人に利用され、石造りの頑丈さと永続性を実証しています。

また、義己社長は採掘資源の100%有効活用に向け資源活用の研究に励み、再生プラントの建設や原状復帰に向けた採掘計画の更新にも精力的に取り

組まれ、業界における先駆者的な存在として活動されていました。

石材が建造物として後世に受け継がれ、多くの人が利用し続けること、そして採掘した天然資源を無駄無く使い切ることは環境に配慮した取り組みであり、SDGsの理念にも適っていると実感しました。

こうした取り組みについて義己社長は静かな口調で淡々と説明されましたが、その一言ひとことに、日本有数の石の産地で業歴を重ねてきた老舗としてのプライドと、石の産地を守ろうという気概を感じました。当社は間もなく創業70周年の大きな節目を迎えますが、採石事業を通じて地域社会と共生し、新たなステージへと飛躍する姿を確信すると共に、人と石との関係性を再認識した取材となりました。

(大森記)